全小国研会報

No.９４

発行所
全国小学校
国語教育研究会

事務局
三鷹中央学園
三鷹市立第七小学校
事務局長 中島亮子

全小国研半世紀の歩みとこれから
～五十周年記念大会を迎えて～

全国小学校国語教育研究会
会長　佐伯孝司

昨年九月十七日、全国小学校国語教育研究会創立五十周年記念式典を東京で開催しました。御来賓として、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官　大塚健太郎様、京都女子大学教授　水戸部修治様、金沢学院大学准教授　菊池英慈様をお迎えし、全国各地から本会の歩みを支えてくださっている皆様にお集まりいただきました。本会を築き、大切に育ててこられた皆様方の熱く深いお気持ちを受け継ぎ、活動の成果を改めて確かめ、現在の全小国研を担う者がその役割と責務を自覚し、進むべき方向とその価値を見出すとともに、本会のさらなる発展の第一歩を踏み出す一日になりました。内容については、この後のページをぜひ御参照ください。

昭和四十七年（一九七二年）八月、全国小学校国語教育研究会結成大会が開催され、小学校の国語科教育研究における初めての全国組織として本会は生まれました。昭和四十六年施行の小学校学習指導要領に示された国語科の目標に「国語で思考し創造する能力と態度を養う」という言葉があります。知識・技能だけでなく、思考力、創造力の育成が求められ、言語活動の例も示されました。現在の「新しい学力観」につながる転換であると捉えることができると思います。新しい小学校国語科教育の歩みを支える研究が、本会の発足によって、より確かなものになったと考えます。研究課題や内容は、小学校段階に合ったものに焦点化されます。また、全国組織の強みを生かして、多様な研究実践の交流・共有すること、小学校国語教育研究の一層の充実に向けて広く発信することなどもできます。本会は、半世紀にわたり、全国の小学校国語教育関係者の力を結集し、わが国の小学校国語教育の推進と発展に寄与してきたものと自負しております。

現在も、全国の国語教室では、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を進め、指導と評価の一体化を図り、言語活動を適切に位置付け、学習展開を工夫しながら主体的な学習者として児童を育てるなど、様々な課題解決に向けて、実践的な研究活動を重ねていると認識しています。各地の重点的な取組はそれぞれの伝統や地域性に応じて工夫されていますが、その共通するところは、全国的に研究成果や課題を共有しながら授業改善に取り組むことが、より子供たちのためになるものと考えます。私たち全小国研は、全国の全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けてその役割を果たし、本会のさらなる発展に向けて最善を尽くしてまいります。今後も、この会報はもちろん、全国大会、実践交流セミナー等の活動を通じて、御理解をいただければ幸いです。

今年度の全国大会は、本会創立五十周年記念大会として、一月二十六日(木)・二十七日(金)に、第五十二回全国小学校国語教育研究大会・熊本大会を開催します。今大会が、本会五十年の歩みと未来をつなぐ一歩になるよう努めてまいります。大会主題は「未来を拓く言葉の力を培う国語科学習の創造～学びを自覚し、共に更新し続ける子供の育成～」です。全国の小学校国語教育関係者にとって関心の高い内容です。大きく速く変化していく社会の中で予測困難な未来を切り拓いて生きていく子供たちに必要な資質・能力として、様々な課題に対応する確かな学力、他者と協働し他者を思いやる豊かな人間性、主体的な学習者としての態度等、子供たちと共に創り出す新たな国語の授業についてビジョンを描いていきたいと思います。子供たちが、学びのつながり、学びのゴール、学びの価値を自覚したうえで、協働的に新たな学びを積み重ね続けていく姿を共有しながら、私たちも共に学び、共に更新し続けていくことができればと思います。より充実した大会となるよう、御理解と御協力をお願い申し上げます。今大会も、大塚健太郎様には、講話を通じて御指導いただきます。教科書教材にも取り上げられている「カレーライス」等の作者としても著名な、作家　重松清様には、「ことばの力～読書で育む想像力～」をテーマに御講演をいただきます。また、安田女子大学教授　田中宏幸様には、「考えたくなる、伝えたくなる国語科の授業づくり」をテーマに御講演をいただきます。皆様にとって実り多い大会となることを願っております。

結びになりましたが、九州小学校国語教育研究協議会会長　清田浩文様、熊本大会運営委員長　齊藤正信様をはじめ、熊本県小学校教育研究会国語部会及び熊本市小学校国語教育研究会の皆様には、たいへんお世話になりました。本大会の開催にあたり、御協力くださいましたすべての皆様に心より御礼申し上げます。

（東京都渋谷区立臨川小学校長）

創立五十周年記念式典の報告

○期日　令和四年九月十七日（土）十三時三十分～
○会場　ＴＫＰ築地カンファレンスセンター

一　第一部　開式の辞　司会進行　長沼正城（全小国研事務局長）
・会長挨拶　佐伯孝司氏
・名誉顧問挨拶　榊原良子氏　顧問代表挨拶　押上武文氏
　５０周年式典に心より感謝、創立の困難さと半世紀の重み、後輩に引き継ぐべき責任をもちつつ、更なる発展を。
・来賓挨拶　元教科調査官　水戸部修治氏
　前教科調査官　菊池　英慈氏
　現職教員の指導力（質的）向上に向けて今後ともご尽力を。
　全小国研の重責に感謝と敬意。車の両輪として更なる向上発展を。

二　シンポジュウム　「全小国研の功績と展望」（詳細は次ページ）

三　記念演奏　アルパ奏者　丸田　恵都子氏
　［曲名］「到着」「ミショネラ」「琵琶湖周航の歌」他
　アルパとはパラグアイ楽器のこと。

四　記念講演　文科省教科調査官　大塚　健太郎氏（詳細は後ページ）

五　第二部　懇談会　司会者　中島亮子（全小国研副会長）
・全国大会開催地の挨拶（熊本県・広島県）
・各地区でご活躍されている理事の皆様、また数名の顧問・参与の先生からの思い出深いお話に花が咲いた

◆記念式典には、ご来賓が三名、名誉顧問・顧問・参与三十一名、理事七名、熊本と広島の大会実行委員委員三名ずつ、そして国語研究所協力委員並びに関係者十四名、本部役員九名、総計五十六名で意義深き記念の節目を刻むことができた。

記念式典・顧問代表の挨拶

押上武文 顧問

創立五十周年を心から祝い合いたいと思います。本会につながりのある全ての人に感謝し深い敬意でいっぱいです。特にメイン事業である全国研究大会ごとに、リーダーの皆さんや大会設営・会場準備・案内・受付・宿泊の諸事務を担ってくださった、あの清々しい立ち居振舞いがあったればこそと反芻する次第です。

さて、今回、佐伯会長から丁寧な電話までいただき、挨拶の依頼を受けました。老齢と病状で健康面で芳しくなくどなたかにと百パーセント思ったのですが、皆さんと共に五十周年式典を味わえればと必死の思いで築地に参りました。

「老齢は静かに去るのみ」という美徳の箴言がありますが、あえて爺のぼやきだと、一つだけ聞いてくださると幸いです。

それは、五十周年を機に未来に向けて「全小国研の指標・指針」を提起できなかという問いです。これまで蓄積した公的役割の評価と自己批判をするとともに、児童が生きる研究つまり成長させるのではなく、自ら成長するのを支える指導成果をもとに、本日のシンポジウム、記念講演を踏まえて、全小国研の生命線を確認し、その相を形作り発信できないかということです。

個々の実践研究の独自性を尊重し、違っていていい、それをあらがい磨き合えばいい、研究団体として、「令和の日本型学校教育構想」が示される教育改革が求められる今日、国語教育の重要な課題を受け止め、いわば「全小国研国語教育宣言」なるものの提言です。

例えば、端的に前文というか本文に趣意・趣旨を述べ、想定される４ないし５の観点・視点から主張項目を立てる。そして熊本か広島大会で提唱する。

老いぼれの戯言であります。とにかく、全国小学校国語教育研究会の前進を！飛躍しましょう！

創立五十周年記念式典　シンポジウム
「全小国研の功績と展望」

◆シンポジリスト
榊原良子名誉顧問、西村佐二顧問、上田保明顧問、西岡由郎顧問
■司会進行　佐伯孝司会長

○佐伯孝司会長
　このシンポジウムでは、この五十年間の歩みを皆様と振り返りながら今後の全小国研の展望について考えてまいりたいと思います。

【五十年間の歩み】

○榊原良子先生
　昭和五十四年、瀬川榮志先生が東京都指導主事から校長として着任された際に、「全小国研の事務局長になったので、手伝える人は手伝ってもらえないですか。」というお声をかけていただいたのがきっかけでした。それからのお付き合いです。西村先生は庶務にいらっしゃって、全て謄写版で刷りながら資料を作っていました。今日に至るまで、山あり谷あ　りでした。苦しかったことも含め、今日は、主に事務局の一員としてお話させていただきたいと思います。
　谷と言えば、決算報告で繰り越し金が九百四十九円という困窮期がありました。山と言えば、協賛金を百十四万円いただくことができたため、事務局のそれぞれの部毎に研究会をもつことができたという充実した年度もありました。
　また、全国大会は、年に一回開催することを原則としていますが、嬉しいことに、希望される都道府県が多く、年に二回全国大会を実施したことが過去に二回ありました。
　一方で、開催地の諸事情もあり、どうしても実施する年度の調整がつかず、全国大会の開催を断念せざるを得なくなるかも知れない・・・。という窮地に立たされたことが過去に一回だけありました。幸い、水戸部先生が京都を紹介していただいたお陰で、途切れずに全国大会を開催することができて、事務局一同、安堵したことが思い出されます.
　さて、本会は、「研究内容の充実」「組織の拡大」「財政の確立」の三つの基本方針の基で諸事業を行っています。その成果の一つ目は、研究書、開発教材等の出版を行ったことです。その中でも季刊誌「小学校の国語科教育」は、昭和五十六年から十年間発刊しました。また、第八回大阪大会を皮切りに、「全小国研　研究シリーズ一～四」も出版しました。
　第十二回和歌山大会以降については、瀬川先生にご指導いただきながら、それぞれの開催地の大会主題とそれに基づく内容を単行本にして全国に発信してきました。これらの書籍の出版を通して、〝人を育て、組織がつながる〟つまり、「研究内容の充実」「組織の拡大」に大きく寄与したと思います。

　成果の二つ目は、全国大会開催の成果です。参加者のメリットは勿論ですが、開催地においても、ご苦労された分、人が育ち、組織の更なる充実につながったことを実感いただけたことです。また、全国大会開催を機に、本会の組織に入会いただいた県も多くありました。

○西村佐二先生
　現職を離れ十八年が経ちまして、そのうちの十年は大学の教職課程で学生に教えていました。今回何気なく引き受けてしまいましたが、引き受けてから「しまった…」と思っております。というのも、途中十五年間は、行政に入っておりまして、しかしその後の何年間は関わることができ、その中でお話ができればと思い、参加させていただきました。
　瀬川先生につきましては、国語教育について熱心にご指導を受けて、それが今でも私の財産になっております。三点申し上げたいと思います。
　その第一点は、昭和五十六年五月全小国研季刊誌「小学校の国語科教育」創刊号の巻頭言で瀬川先生は、これまで、一つの課題について全国的な組織で、実践研究することが極めて少なかったことを考慮し、その実現に向けて、「全小国研の恒常的な活動の一環として、「研究書」と「季刊誌」を発行することになった。ようやく、第一の到達目標にたどりついたことになる。これまでの経過を振り返って感無量である。・・・」と述べられています。その思いのとおり全小国研の組織を通じて、小学校国語教育の在

り方について全国的規模での研究を推進する道筋を付け、それを大会、機関誌、研究書等を通じて着実に実践されてきたことが、最も大きな功績だと考えています。

昭和四十八年度の第一回東京大会以降、今年度第五十二回熊本大会までほぼ途切れることなく開催され、その時代時代の小学校の国語教育を実践的に解明し、全国に提言を発信し続けてきたことだと思っています。

さらに三点目の成果として、本日も教科調査官の先生が来てくださっていますが、第一回大会以来、常に文部省の視学官や教科調査官のご指導を受け、学習指導要領に基づいた国語科教育の具現化について、国と一体となって情報発信に努めてきたことが挙げられると思っています。

○上田保明先生

退職しまして十一年目を迎え、現在、地元の小さな大学で教員養成に関わっております。私自身も若い頃から全小国研の全国大会に参加してきました

私が考える全小国研の功績として、まず本会が五十年も全国大会を開催し続け、日本の国語教育をリードしてきたことが素晴らしい。その平成十年には山口大会が開催され、私も若干関わりました。大会開催の十年前、本会の理論的・精神的なバックボーンであった瀬川榮志先生と、当時山口県国語の事務局長であった私は意気投合し、「山口大会を開催してほしい」という瀬川先生の声かけからはじまり、大会を実現させました。大会当日は本部役員の先生方のお力添えで千二百名を超える参加者で盛会。この大会を通して山口県から多くの実践者が輩出されました。

第二の功績は、大会や研究会で必ず文部科学省の調査官の講演を企画していることです。全国の最新の国語情報を生の声で聴く機会は刺激的でした。多くの若者が感化され大きな飛躍のきっかけとなりました。

第三には、全国大会の開催によって、全国の〝点〟であった実践者同士が、その出会いによって〝線〟となり、そしてそれが〝面〟となって県外の先生方とのつながりも生まれ、新しい授業開拓につながっていきました。一例を挙げます。平成二十一年の北海道大会で、二年生の分科会（教材「サンゴの海のさかなたち」）はインフルエンザで学級閉鎖。急遽の模擬授業は独自開発の教具を使っての実施。その授業者であった、中島大輔先生(現北海道教育大学附属小学校教員）は、確かな理論のある授業を提供。私は、その成果を広めたく、その後、模擬授業が素晴らしかったことと、教具が欲しいことをお伝えしたら、すぐに送ってくださいました。各地には素晴らしい実践者がいます。しかし、それは点であって線になっていません。それがこの組織を通して、線になり、研究大会を通して面になるのだと思います。

また、全国大会を開催した地区では研究図書の出版も行っていただき、自分の実践が書籍に掲載されるという喜びで研究がさらに盛り上がり、県内の実践者同士のつながりも深まるよい機会となりました。

○西岡由郎先生

奈良大会についてお話したいと思います。私と全小国研との直接的な出合いは、今から二十九年前、一九九三（平成五）年六月に第一回「全小国研賞」をグループ部門でいただいたことに始まります。

当時私たちは、国語科教育に力を注いでいたメンバーで研究会をつくり、実践を持ち寄り、学びを深め、年に一回、『国語学習研究』誌を発行してきました。その研究実践をまとめ応募したところ、「全小国研賞」をいただくことができました。また、幾度か全国大会に参加を通して学ぶ機会をもってきました。このように、個とグループを育ててきていることが全小国研の功績の一つだと思います。

二つ目の功績は、全小国研は、各地の大会開催を支えてきたことです。私は平成二十三年に奈良県国語教育研究会会長に就任し、その年の全国理事会において全国大会開催のお話をいただきました。平成二十六年十月二十三・二十四日に奈良県国語教育研究会を兼ねて第四十四回全国小学校国語教育研究大会を奈良の地で開催しました。「チーム奈良」を合い言葉に、「伝統文化の宝庫から全国へ発信を！」をスローガンに、地域素材の学習材化を図り、単元構成を工夫した内容を発表できるような研究大会を目指しました。

同時に、大会に合わせて『小学生に親しませたい「今に生きることば」』を記念出版し、七百名を超える参加者にお持ち帰りいただいたことが懐かしく思い出されます。

大会開催にあたっては、大会主題の共通理解を図ることに苦労しました。当時の学習指導要領で「伝統的な言語文化に関する事項」の指導の充実が

指摘されていたものの、私たちが参考にできる先行研究は極めて少ない状況でした。本日お見えの水戸部先生に何度もお越しいただき御指導をいただきました。

私の勤務校は、「かぐや姫」伝説が伝わる学校で、それを扱う学習を進めました。先行研究が少ないことから、試行錯誤の繰り返しでしたが、迷うことなく開発提案型の研究を進めました。結果としてこの開発提案型の攻めの研究方法は大変よかったと思います。

勤務校の研究実践は水戸部先生のお力をお借りしまして、明治図書より『伝統的な言語文化の授業 パーフェクトガイド』を出版できました。

全小国研により開催地の大会が支えられ、そこでの成果が次の開催地につながるという道筋がつけられています。その成果を全国各地に浸透させてきたことが功績だと思います。

【今後の展望について】

○榊原良子先生

初期の頃の研究大会への参加者は二千人を超えることが多くありました。今では難しいですよね。当時は、インターネットが進んでいなかったですし、書籍も十分ではありませんでした。条件が変わっていますので、参加者の数だけでどうこうは言えませんが、意気込みが昔は強かったように思います。全国大会に参加することで得られるメリットは大きいと思いますが、今は、参加すること自体に厳しいところがあるのではないでしょうか。

今後は、今まで以上に、魅力的な発表内容となるように吟味すると同時に全国への発信方法についても工夫していくことが大事だと考えます。

研究と組織、それを支えるのが財政です。このことを考えると組織を充実させなくていくことが重要になると思います。会則の細則第一章の第一条に「ブロックの構成」が明記されています。その全国に置かれている十一ブロックを機能させていく必要があります。例えば、奈良の理事の方が理事会に出席されなかった時、参加された近畿ブロックの理事の方、または、ブロック代表の方が当日の概要を伝える・・・等、気楽にブロック内で情報を交流していただくようになればよいなと思います。そうすることで、協議した事項が周知徹底できますし、組織も充実してきます。組織が充実すれば、財政も充実してきます。

○西村佐二先生

五十周年という記念の時を迎えました。改めてこの機会に原点に立ち戻る勇気をもってほしいと思います。一般企業の平均寿命は三十年だと聞いたことがありますが、一般的に年数が経過すれば経過するほど、相当な努力をしないと組織は衰退の一途を辿るものだと思っています。昔と今を比べると組織も細くなってきたと感じます。

発足当時よりも人が少なくなっています。改めて五十周年を機に、全小国研の存在意義、その必要性を協議し、それぞれの思いを共有しながら、立て直していくことが必要だろうと思います。

○上田保明先生

山口県も全国も児童数の減少、教員不足の現状があります。教員の新規採用の倍率も小学校は2倍を割っています。教職への魅力を、国語教育を通して発信できないものかと思っています。

優れた国語教育授業実践の紹介を行って、小学校教育の魅力・小学校教員の喜びを積極的に広め、教員志望者を増やしたいものです。その役を全小国研が担うとよいと思います。全国大会、国語研究所などの活動をとおして、今後一層国語教師の喜びや醍醐味を発信してほしいです。

また、全国に点在する優れた実践者は点として活躍していますが、全小国研がこれらの優れた実践者を結び付け、線に、そして面に広げていって、日本の小学校国語教育を隆盛してほしいと願っています。

○西岡由郎先生

奈良大会を引き受けたとき、当時の全小国研の大野会長、顧問・参与、理事、事務局の方々が支えてくださいました。組織のバックアップがあったのです。ぜひ、大会の開催地に元気を送る全小国研であってほしいと思います。開催地の国語教育の充実、発展に大きな役割を担っているのだと思います。

また、未加入の府県の加入を求めることも必要です。各都道府県のネットを構築し、ホームページから全国に向けて発信するなど、交流する場づ

くりが必要です。組織を運営するには、自立可能な財政基盤が重要です。徹底して支出を切りつめ、未加入の府県からの参加を始めることに向けて、努力する必要があるのだと思います。また、収益の上がる授　業や取組に関わることも重要です。

○佐伯孝司会長

もう一度「全小国研」を見つめ直し、継続的な取り組みについて基盤を固めて進めていく、研究の発信…など、それぞれのお立場から貴重なご意見をきかせていただきました。最後に先生方に、一言ずつまとめの言葉を頂戴したいと存じます。

○西岡由郎先生

全小国研に求められる最大のミッションは、全国小学校国語教育研究所と手を結び、授業実践に資する研究を広めることだと思います。開催地が遠くて、参加したくても参加できない人のために、夏季実践交流セミナーや研究発表会を東京以外での開催するのはどうでしょうか。または、その時の模様をネットで配信することも考えられます。

また、「全小国研賞」や「教員表彰」制度に後押しされ、人材が育つという面があります。この制度の周知を図り、人材発掘に生かし、人材の成長から研究の広がりや組織づくりに期待できます。引き続き組織と財政基盤の充実を図り、「全国小学校国語教育関係者の力を結集し、わが国の小学校国語教育の推進と発展に寄与すること」という目的の達成を目指していただくことを期待します。

○上田保明先生

平成十年、第二十六回山口県大会の大会主題は「二十一世紀を拓くことばの世界」でした。二十一世紀は改めてことばを人間形成の中心に据えるべきだとの主張でした。二十一世紀の序章ともいえる二十二年の経過した今振り返ってみると、若者のみならず幼少期の子どもたちにもことばの乱れが広がりつつあります。一例として就学前からの幼児、児童が自分のことを「俺」ということばを教師に向かって何のためらいもなく発します。受け手の教師も何の違和感を持つことなく応じます。社会秩序の乱れの一端と思うのは私だけでしょうか。

全国の国語教師がことばで人を育てるという原点に立ち返って、ことばの重要性を再認識し、美しく品のあることばのつかい手を育ててほしいものです。その先導役が全小国研であるべきだと思います。

○西村佐二先生

前回の松山大会の「会報」を見ながら、よい大会だったことが伝わってきました。その陰に苦労も多くあったのだろうなと感じました。教科調査官の話もよく分かりました。しかし、この広報誌がどこまで広がっているのでしょうか。どれだけの人がそれを共有できたのだろうかと思い、「会報」だけでは難しいのだろうと思います。

それぞれの人がどうつながっているのか、そういうつながりという役割を全小国研が担わないといけないと思います。開催地の良い研究が、全国のものになっていくことを考えていただくとありがたいと思います。五十周年という佳節を機に、さらによいものにしてほしいと思います。

○榊原良子先生

今、教育現場の先生方、特に管理職の先生方は、自分の研究時間がもてないというのが現実のようです。情報は留めておかずに広げていく努力をして来ましたが、まだまだ十分ではないと感じております。

組織を作っているのは人、人なのです。休日も返上して活動してきた今回の記念式典準備委員会でしたが、その厳しい中で進めて参りました。どこでもそうですが、やはり人なのです。特に、束ねていく事務局の皆さんはこの会を好きになってもらいたいと思います。会を好きになってもらわないと研究会そのものがよくならないし発展していかないと思います。誠意ある行動と言葉による「健全な人間関係の構築」と「恒常的な情報交換」を通して、事務局と全国理事、関係組織との「恒常的な情報交換」を図り、更に全小国研の役割が果たされることを願っています。

○佐伯孝司会長

今日の学びから全国の方々に提言できるような歩みを今後も進めてまいりたいと思います。本日は貴重なお話をありがとうございました。

記念講演

演題「小学校国語科における学習指導要領がめざすものと その実現に向けてみえてきた課題」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
大塚　健太郎　氏

一　「全国小学校国語教育研究会」の功績について

全国小学校国語教育研究会があるので、全国の教師と実践をつなげることができている。つながり方は、点から線、線から面になっている。

二　学習指導要領で目指すこと

現行の学習指導要領は、授業において教師がどうしたか、子供が何を学んだかという視点、主語が子供、学び手が子供という表現になっている。「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの力をバランスよく育むことを目指していく。

三　「主体的・対話的で深い学び」の視点

前述の三つの力をバランス良く育むためには、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善が必要である。「主体的な学び」の実現に向けて、子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習を展開する。「対話的な学び」の実現に向けて、例えば子供同士、子供と教職員、昔の自分等が、互いの知見や考えを伝え合ったり協働したりすることを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動の場を計画的に設ける。「深い学び」の実現に向けて、「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉で理解したり、表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動が考えられる。

四　「主体的・対話的で深い学び」の具現化の方法について

・授業は学習指導要領の目標に立ち返り、指導事項に示す資質・能力の育成が第一。

・国語科は、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象とする特質を有している。すなわち、様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的とするものではない。

・国語科においては、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、創造的・論理的思考、感性・情緒、他者とのコミュニケーションの側面から、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること、またそのことを通して自分の思いや考えを形成し、深めることが重要である。

・資質・能力を育成するためには、言語活動が大切である。資質・能力の育成には、学習評価がしっかりできているのが前提である。児童の学習改善、教師の指導改善から、必要性・妥当性が認められないものは見直していくことが必要である。

五　令和四年度全国学力学習状況調査から見えた課題

書くことの領域においては、「自分の文章の良さを見付けること」等に課題があるため、文章全体の構成や書き表し方などに着目して文や文章を整えられるような指導とともに、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付ける指導の改善充実が必要である。そのためには、指導者が言語活動の引き出しを増やしていく意識を高めていかなければならない。

六　終わりに

様々な場所で講演などをしていて感じることは、どの地域でも現場はとても頑張っているということである。その現場を支える「全国小学校国語教育研究会」であってほしい。

【令和四年度　全小国研　第一回理事会報告】

令和四年度全小国研第一回理事会は、七月に書面総会をいたしました。左記の事項について、ご承認いただきました。また全国理事、名誉顧問・顧問・参与の先生方から、各地の研究情報や運営へ貴重なご意見やメッセージ等を頂戴しました。

一　令和三年度　会務報告

第一回理事会　六・七月　書面開催
夏季実践交流セミナー　中止
第二回理事会・総会　令和三年十一月書面開催
第五十一回全国国語教育研究大会・愛媛大会　オンライン開催
十一月十六日～三十日　授業公開（動画）、分科会発表、講演（動画）
会報発行五月92号

二　令和三年度　会計報告・会計監査報告【第一・二号議案→承認】

三　令和四年度　本部役員選出【第三号議案→承認】

会　長　佐伯孝司（渋谷区立臨川小学校長）
副会長　清田浩文（熊本県熊本市立植木小学校長）
岩本和貴（広島県広島市立梅林小学校長）
山口麻衣（東京都都文京区立千駄木小学校長）
吉井広明（東京都練馬区立豊玉東小学校長）
中島亮子（東京都三鷹市立第七小学校長）
事務局長　長沼正城（東京都清瀬市立清瀬第四小学校長）
会計部長　関根幸男（東京都練馬区立光が丘秋の陽小学校長）
会計監査　笹川悦郎（東京都板橋区立蓮根小学校長）
小原太一（東京都あきる野市立多西小学校長）

四　令和四年度活動方針及び事業計画案【第四号議案→承認】

（一）活動方針

①研究内容の充実

新世紀を拓く国語科教育の理念等について、全国的組織で研究を推進する。学習指導要領の趣旨を踏まえ、主体的・対話的で深い学びを視点とした授業改善を中心に、確たる実践理論の構築を目指す。今年度については、本会創立50周年記念事業に取り組むとともに、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、各事業の開催については例年とは異なる対応をとる場合もあることとする。

②組織の拡大

加入都道府県、政令指定都市との密接な連携を図るとともに、未加入府県、政令指定都市との情報交換を計画的に行って、都道府県研究会、政令指定都市研究会による全国組織の活動を展開する。

③財政の確立

恒常的な活動が順調に展開されるように、財政の安定化を図る。

（二）事業計画

①令和四年度第一回理事会　書面開催
②第三十二回夏季実践交流セミナー　五十周年記念式典と兼ねる
③全小国研研究会賞、○教員表彰について
④令和四年度第二回理事会・総会
⑤第五十一回全国小学校国語教育研究大会・熊本大会
人数制限にて理事会・総会を開催　ハイブリッドによる大会の開催
大会紀要（冊子版）とデンタル紀要の発行・配付
⑥広報・その他　会報発行第九十三、第九十四号

五　令和四年度　予算案【第五号議案→承認】

六　全国小学校国語教育研究会五十周年記念式典事業【第六号議案→宋任】

①主催母体　全国小学校国語教育研究会内に五十周年記念事業準備委員会を置き計画実施
②開催日　令和四年九月十七日（土）
③会場　ＴＫＰ築地カンファレンスセンター
④内容
○会長挨拶、名誉顧問挨拶、顧問代表挨拶、来賓挨拶
○シンポジュウム「全小国研の功績と展望」
○記念演奏　アルパ演奏
○記念講演「小学校国語科における学習指導要領が目指すものとその実現に向けて見えてきた課題」
○懇談会（次期大会県の挨拶、顧問や理事の挨拶等）

七　第五十三回全国小学校国語教育研究大会広島大会のお知らせ

大会主題「伝え合う力を高め、言葉の力を育む国語科教育の創造」
令和五年十一月十六日（木）JMSアステールプラザ
令和五年十一月十七日（金）広島市立白島小学校・市立本川小学校